健聴中学生との交流学習に関する取り組み

廣瀬　由美
西分　貴徳

平成 23 年度、本校中学部 1 年生が近隣市の公立中学校との交流学習に取り組んだ。自立活動などで学んだことを振り返りながら本校の特徴について説明したり、聴覚障害への理解を深めてもらうためにコミュニケーションを取る方法を考えたりして交流学習を行った実践の報告である。

【キーワード】　交流学習　手話ソング　総合的な学習の時間　表現力

1　はじめに

通常の中学校では、総合的な学習の時間で福祉についての学習に取り組むことがあり、特別支援学校との交流学習の機会をもつことがある。本校中学部でもそのような申し出を受け、交流学習を行っている。

一方、手話について学習する際に手話ソングを取り上げており、文化祭のステージ発表や交流学習のプログラムの一部として取り組んできた。

本稿では、平成 23 年度の中学部 1 年生、2 学級 13 名が自立活動などで学んだことを生かし、同年度 11 月に行った公立中学校との交流学習の実践について報告する。

2　交流に向けた事前学習

今回の実践に取り組むきっかけとなったのは、総合的な学習の時間に手話の学習に取り組んでいる近隣市の公立中学校から交流の申し出があったことである。相手校の要望を踏まえ、学習活動の内容を本校中学部の特徴や聴覚障害についての学習と手話ソングの学習に決め、学年全体を対象にして交流学習に向けた事前学習を学級担任 2 名のティーム・ティーチングで行った。

(1)　本校の特徴と聴覚障害についての学習

本校と相手校の違いについて、通常の小学校出身の生徒の体験や小学部の給食交流の体験などを交えて、知っていることを話し合わせた後、さらに始業前に預かっている携帯電話や定期券が入った貴重品ボックスの例を挙げながら通学区域の違いなどについても考えさせたり、「自立活動」とはどのような学習をする時間なのかを説明できるように話し合わせたりした。また、本学習以前に自立活動で補聴器について学習した際に用いた ICT 教材を用いて、生徒たち自身が補聴器について説明できるよう、基本事項の復習を行った。(図 1)

図 1　本校の特徴と聴覚障害についての学習の様子

(2)　手話ソング教材の作成および手話の学習

本実践では、平成 21 年度の中学部 2 年生(本実践時は既卒)が自分達を被写体として作成した『手紙～拝啓　十五の君へ～（作詞作曲：アンジェラ・アキ)』の手話ソング教材を参考にして、健聴の中学生に手話ソングを教えるための教材を作成した。

対象生徒 13 名中、本校小学部からの進学者が 10 名(うち 1 名が通常の小学校からの編入生)、通常の小学校からの入学者が 3 名であり、この実践に取り組む前は、1 学期に指文字の学習を終えていたものの、全体としては手話については学習していなかった。自主的に書籍などで学習したり、以前通っていた学校で学習したりして手話を使っている生徒もいたが、全く使わない生徒も多く、使っている生徒のほとんどが先輩や教員の真似をしながら使っているという程度であった。

そこでまず、全体で卒業生の手話ソング教材を視聴し、表現方法や視聴者への伝え方の工夫について考えさせた。また、交流学習で教えるということをふまえ、より自分達にとって分かりやすく、使いやすい教材にするために、自分達を被写体として映像を撮り、教材を作り直すことにした。

教材作成の手順は、まず、教員が生徒の人数に合わせて曲を 13 の部分に分け、担当を決めさせ、卒業生の動画を見ながら、それぞれ練習を行い、次に微調整や必要に応じた撮り直しなど修正をしながら映像を撮影した。その映像を教員がつなぎ合わせ、仮のものとして 1 つの映像に編集した。

仮の映像を全員で視聴して、個々の手話表現の仕方に修正が必要な点､前後の人とのつながりや流れ、同じ単語を他の人が表現している場合の表現の仕方の違い､統一の仕方などを確認させ､よりよい表現、分かりやすい教材になるように、お互いの表現について意見を出し合わせた｡話し合いの結果を受けて、さらに、試行錯誤しながら、手の形、位置、向き、動かし方、視線など細かい点にも注意して練習をさせた後、再度それぞれ自分の表現に納得がいくまで撮影を行った。

教材作成の活動の際には、映像の撮影を時間割等の都合で数日にまたがって行ったが、生徒達は撮影を行っていた期間、始業前や昼休みなど、手話が比較的得意な生徒を中心として自主的に表現方法を検討し、練習していた。非常に熱心に取り組む様子が大変印象的だった。表現の方法についても卒業生が用いていた表現や教員の方から提案した表現にとらわれず、自分達らしい表現を模索している様子がうかがえ、自分たちで教材を作り上げようとする強い意欲を感じることができた。

教員が編集をし、字幕をつけて出来上がった教材(図 2)を用いて、全曲を通して歌えるよう、帰りの HR などの時間も活用して練習を行い、自分が撮影の際に担当した以外の箇所についても手話表現の説明ができるよう、説明の仕方なども考えさせた。

全曲通し練習に関しても、始業前や昼休みなどに自主的に練習する様子が見られ、手話ソングに対する関心・意欲の高まりを感じることができた。

図 2　作成した手話ソング教材の画面

また、手話ソング以外に、自己紹介などで用いるために既習の指文字についても間違えやすいポイントや教える際の説明やアドバイスなどについて確認した。加えて、姓を表す際によく用いられる手話表現、たとえば、佐藤、斎藤など固定している表現や小林､田中､山本など漢字の表し方の学習も行った。

3　交流当日の学習の流れと様子

当日は、午前 10 時頃、相手校の教員・生徒が到着し、ガイダンスを行った。以下の流れは表 1 のとおりである。

表１　当日の活動の流れ

10:40	全体活動(1) 顔合わせ
11:10	グループ活動(1) ①自己紹介(部活、趣味など)、リーダー選出 ②校内見学 ③話し合い（本校の特徴など）
12:10	全体活動(2) ①話し合いの結果の発表 ②本校生徒による手話ソングの発表 グループ活動(2) 手話ソングの練習
12:30	昼食・休憩
13:20	グループ活動(3) 手話ソングの練習
14:00	全体活動(3) ①手話ソングの発表(2 グループずつ) ②手話ソングの斉唱 ③挨拶、記念撮影
14:30	解散

顔合わせでは、本校生徒の代表が挨拶し、生徒全員が氏名のみの簡単な自己紹介を行った後、グループメンバーを発表した。グループについては、事前に両校の教員で相談し、本校生徒 13 名と相手校生徒 16 名を混合し、4 つに分けた。

グループで校内を案内した際には、本校生徒たちは教室を案内しながら、机の配置、集団補聴器、パトライト、文字表示装置、時間割(「自立活動」)などについて質問を受けたり、解説を行ったりしていた。事前に準備した資料(生徒自宅所在地分布図など)をもとに、通学範囲なども話題にしていた。コミュニケーションは口話を中心に筆談、指文字、手話などを加えて行われていた。(図 3、図 4)

教室を案内した後、分かったこと、気づいたことについて話し合い、プリントにまとめた後は、テーマを決めて自由に話し合いを行った。テーマは中 1 が話しやすい「好きなこと・趣味」、「部活・生徒会活動」、「学校行事」、「家族・家庭生活」などを例として挙げ、それを糸口として自由に話し合わせた。テーマを掲げることで初対面でもスムーズに話し始めることができ、打ち解けてくるにしたがって自然に話題が広がっていくようだった。(図 5、6)

本校生徒から相手校生徒へ手話ソング『手紙　～拝啓　十五の君へ～』を披露する際には、事前に作成した教材をスマートボード上で活用した。

その後、4 つのグループに分かれ、教材を活用しながら、昼食・休憩をはさみ、手話ソングの練習をおこなった。映像を一時停止したり、スロー再生させたり、相手に伝えようとその場その場で考え様々な工夫をしている様子が見られた。（図 7、図 8）

昼食･休憩時には中学生らしく好きな芸能人の話などで盛り上がったり、中庭で遊んだりして楽しんでいる様子が見られた。

午後のグループ練習の後、手話ソングを 2 グループずつで互いに見せ合った後、最後に全員で歌い、記念撮影を行って活動を終了した。(図 9)

帰り際は、いつまでも話が途切れることなく、お互い名残惜しそうな様子だった。(図 10)

図 3　教室案内の様子(1)

図 4　教室案内の様子(2)

図 5　話し合いの様子(1)

図 8　手話ソングの練習の様子(2)

図 6　話し合いの様子(2)

図 9　記念撮影の様子

図 7　手話ソングの練習の様子(1)

図 10　帰り際の様子

4　結果

結果については、本校生徒の事前・事後アンケート、相手校生徒の手紙の記述、相手校引率教員の感想、参観者の感想から得られた内容について述べる。

(1)　本校生徒 13 名のアンケート

本校生徒 13 名に対し、交流の前後にアンケートを実施した。

①　それまでの交流経験について

本校小学部からの入学生は、近隣の公立小学校を訪問して、給食交流や行事などでの交流の経験があった。

また、通常の小学校の通学経験がある生徒が 4 名、 1 か月の体験入学を行ったことがある生徒が 1 名いた。

②　交流に対する関心・意欲

交流に対する関心・意欲について、事前・事後に尋ねた。

事前アンケートの結果は図 11 のとおりである。

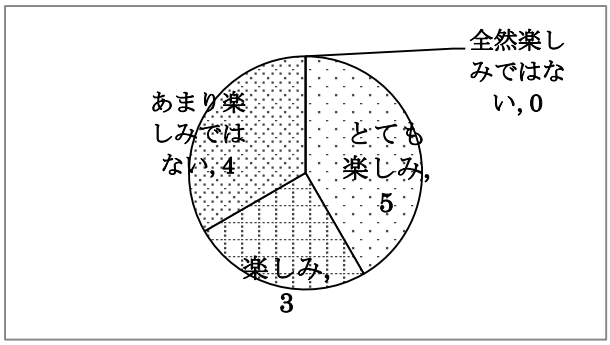

図 11　事前の交流に対する関心・意欲

「(とても)楽しみ」と答えた生徒の方が多いが、約 1/3 の生徒は「あまり楽しみではない」と答えていた。

事前に「(とても)楽しみ」と答えた生徒は、その理由として以下のような記述をしていた。

「(自分たちが訪問するのではなく、)僕達の学校に他校の生徒が来て交流するのは初めてだから」

「耳の聞こえる人と一緒にやるのはあまりないし、もしかしたら友達ができるかもしれないから」

「仲良く一緒に手話をやるのが楽しみだから」

「外の学校から来るから、手話を覚えて話してみたい」

また、事前に「あまり楽しみではない」と答えた生徒については、以下のような理由を記述していた。

「手話とか通じるか心配だし、人見知りだから」

「一度もあったことのない人では話しにくい」

「知らない子が来るから、どんなのかわからないから」

「人見知りが激しいので、初対面の人とはあまり話したくない」

これらの記述から、それぞれの生徒が従前の交流の経験をもとに、自分の性格などを踏まえて、交流に対する意識を持っていたことが分かる。

こうした意識が交流後にどのように変化したかについては、図 12 のとおりである。

「あまり楽しみではなかった」と答えていた生徒が交流を体験して「楽しかった」あるいは「とても楽しかった」と感じたことが分かる。

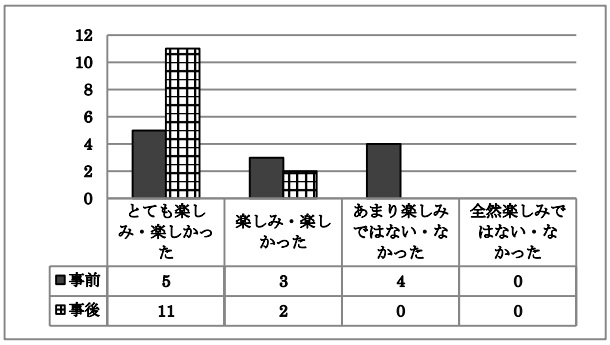

図 12　事前事後の関心・意欲の変化

③　相手校の生徒と積極的に話せたか

交流の活動で相手校の生徒と積極的に話せたかについて尋ねた結果は図 13 のとおりである。

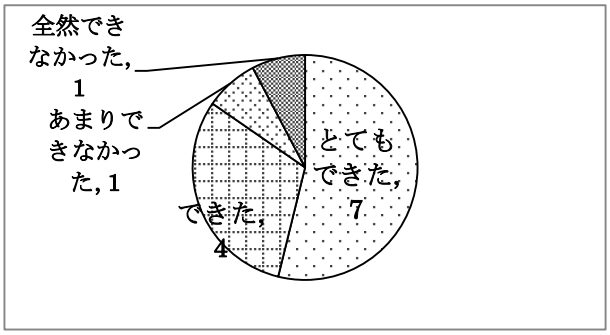

図 13　積極的に取り組めたか

ほとんどの生徒が「とてもできた」「できた」と答えていた。「できなかった」と答えた生徒は理由として、「きんちょう感が高かった」と述べていた。

一方で「(話しかけるのは苦手だが)手話ソングを教えている時には自分から話すことが多かった」と記述した生徒がおり、話し合いで積極的に話すことが苦手な生徒も、手話ソングを教えるという活動の中では話すことができたことがうかがえる。

④　楽しかった活動

楽しいと思った活動について複数回答で尋ねた。

「昼食・休憩」が 8 名、「グループ活動 1（校内見学・話し合い)」が 7 名、「グループ活動 2（手話ソング学習)」が 6 名と多かった。

⑤　相手校の生徒が楽しそうだった活動

相手校の生徒が楽しそうだった活動について複数回答で尋ねた。

「昼食・休憩」が 6 名、「グループ活動 2（手話ソング学習)」が 4 名、「グループ活動 1（校内見学・話し合い)」が 3 名と④と似たような傾向になった。

⑥　聾学校や聴覚障害、手話について相手校の生徒に理解してもらえたと思うか

聾学校や聴覚障害、手話について相手校の生徒に理解してもらえたと思うかを尋ねた結果は図 14 のとおりである。

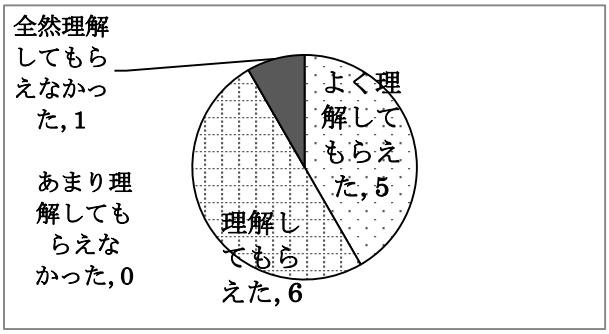

図 14　理解してもらえたと思うか

自由記述欄にはその理由として、以下のようなことが挙げられていた。

「僕達(聾学校などについて)の話を真剣に聞いてくれたから」

「話が通じない時は紙などにメモをしてくれたり、一生懸命手話を使って話してくれたから」

「質問の答え等によく耳をかたむけていた」

こうした記述から、相手校の生徒の話を聞く態度などから自分たちの話した内容がよく伝わったと感じた事が分かる。

⑦　話し合いに関する自由記述

自由記述の中には、話し合いに関する以下のような記述があった。

「きんちょう感が高かった」

「始めのうちは慣れなかったけど、しゃべっているうちに楽しくなりました」

「実際会うまではあんなに話が弾むとか思っていませんでした」

「話がそれてしまいました」

「楽しくしゃべれた」

「筆談をしたから(積極的に話せた)」

「共通する話題があったから(積極的に話せた)」

「初めは緊張したけど、実際に対面してみたら思ったより楽しく話す事が出来た」

「最初の方はあまりコミュニケーションが取れていなかったが、後半の方は楽しく盛り上がれました」

「初めは緊張したけど、実際に対面してみたら、思ったより楽しく話すことが出来た」

「あまり話ができないと思っていたけれど、筆談や会話でも盛り上がった。(中略) 今日は楽しかった」

こうした記述から、最初は少し緊張していたこと、徐々にお互いに慣れて、上手にコミュニケーションが取れるようになり、打ち解け、楽しんで活動に取り組めたことが分かる。

⑧　手話ソングに関する自由記述

自由記述の中には、手話ソングに関する以下のような記述があった。

「(話しかけるのは苦手だが)手話ソングを教えている時には自分から話すことが多かった」

「(相手校の生徒が)上手にできていたのでよかっ

た」

「(相手校の生徒に)やる気があって嬉しかった」

「自分で、他の人の手を動かして手振りを教えると、よく分かっていたみたい」

「歌に出てくる手話の意味を教えて分かるようにしてあげた」

「例えをつかうと分かりやすいみたい！」

これらの記述から、話しかけるのが苦手な生徒も話しかける必要性が生じて話しかけることができたこと、様々な工夫をした結果、自分達が教えたことが相手に伝わり、達成感を得た生徒が多いことが分かった。

(2)　相手校生徒の手紙の記述

後日、相手校生徒からお礼の手紙が送られてきた。その中には以下のような記述があった。

「初めは仲良くできるか不安だったけど(中略)友達と一緒に過ごしているような感じでとても楽しかったです」

「人数が少ないけどすごく楽しそうです」

「帰るときはとてもさみしくて帰りたくありませんでした」

「色々な物の説明を聞けて、とても興味深かったし面白かったです」

このような記述から、相手校の生徒にとっても興味深く、充実した活動になったことが分かる。

(3)　相手校引率教員の感想

相手校引率教員からは以下のような感想があった。

・数回、地元の聾者を招いて手話の勉強をした程度だったので、どの程度話ができるのか心配だったが、生徒同士でスムーズに話ができているのに驚いた。

・生徒達は帰り道、『明日も筑波に行きたい』と言いながら、電車の中で手話ソングを何度も歌っていた。

・学習発表会では他の学習グループの生徒達に向け、学習してきたことや手話ソングを披露する事ができた。

限られた時間での交流であったが、１月に行われた体験学習発表会で学習したことや手話ソングを発表することができ、充実した活動となったようだった。

(4)　参観者の感想

交流当日には偶然ながら、海外からの参観者も来校していた。参観者からは、どの生徒がどちらの学校なのか分からないくらい生徒達が積極的で、堂々と活動していたという感想をいただいた。

5　考察

事前学習では、本校中学部の特徴について話し合い、通常の学校との違いに気づかせることができた。通常学校との違いは聴覚障害によって生じる困難を軽減させるための配慮によるものが多いので、自分達にとって当たり前になっていることを客観的に見つめ、それらの意味を理解することは生徒達にとって大切である。

生徒たちは、今回の活動を通して、自分たちにとって当たり前のことを、そうではない人に分かりやすく伝えるためには、自分たちのことを客観的に見つめ直す必要があることや、単に違いについて伝えるだけではなく、その理由や背景となる状況を合わせて説明する工夫をすることが、健聴者とのコミュニケーションでは大切であることを学習した。

このような学習は中学生との交流学習だけではなく、介護等体験学生の受け入れなどの際にも役に立ち、将来的には身近な健聴者に自らのことを理解してもらう際にも役に立つものと考える。

また、交流学習前にはこうした活動に対して苦手意識を持っている生徒がいたが、この活動の後は、部活動の練習試合、合同練習などの際に自分から話しかけられるようになったという声も聞かれた。健聴者と一緒に活動する際には、ともすれば分からないことを教えてもらったり、何かをお願いしたりすることが多くなりがちだが、自分たちが知っていることを伝える、教えるという形を取ることによって積極性が引き出せたのではないかと思う。

手話の学習に関しては、この実践後、さらに 2 曲の手話ソングに取り組み、多くの手話の語彙や表現を獲得することができた。

今回作成した手話ソング教材は後輩達の手話ソングの学習の際の教材としても用いられている。

そして、この活動を通して育まれた手話も含めた表現する力、伝える力は弁論大会、文化祭の劇発表などにも生かされたように思われる。

6　おわりに

学習指導要領の改訂で、各教科の学習内容が増え、授業時数確保のため、通常の学校でも行事等の縮小などが行われている。そのため、総合的な学習の時間の学習内容も校内で完結するような活動に変わりつつあり、交流の申し込みも一時期より少なくなっている。

本校中学部では、総合的な学習の時間、道徳、自立活動、特別活動をより有意義なものにするために、相互に、あるいは各教科の学習活動と関連付けて学習活動を進めていくように指導計画を工夫している。

今回の学習活動についても、基本的な知識や技能については自立活動で扱い、その内容をいかにして他者に伝えるかという表現の工夫については総合的な学習の時間で扱ったが、交流学習という一つの活動に対して、複数の領域から学習を進めていくことで、より生徒達の思考を深め、知識や技能の定着が見られた。

本来、交流学習は近隣の学校と定期的、継続的に行われることが理想であるが、本校では現在、最寄りの公立中学との交流は生徒会役員に限られている状況である。先に述べたように教科学習の授業時数の確保という課題がある中で、交流活動を量的に増やすことはなかなか難しいが、お互いにとって有意義な活動を行えるよう、活動の評価の仕方などを検討していきたい。

〔付記〕

本研究は、平成 26 年（2014 年）第 48 回全日本聾教育研究大会兵庫大会、J(総合的諸問題)分科会で発表した内容に加筆したものである。

〔参考文献〕

筑波大学附属聾学校中学部(2003) 魅力ある聴覚障害児教育を目指して―ようこそ筑波大学附属聾学校中学部へ―.聾教育研究会

筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2012) 学習指導の工夫と ICT 活用―続・中学部における実践事例―. 第 39 回聴覚障害教育担当教員講習会中学部資料(電子書籍)

廣瀬由美、西分貴徳 (2014)　健聴中学生との交流学習に関する取り組み. 第 48 回全日本聾教育研究大会兵庫大会研究集録 pp.118-119